

きわめて個人的な

映画「時をかける少女」についての

とりとめなき話



みどりのくま

「時をかける少女」とは、もの想う年頃の物語である。

それは冒頭の列車内でのシーンでセリフとして出てくるのだけれど、この物語そのものを表す言葉でもあるし、視る人それぞれの”もの想う年頃”への回帰をいざなう物語ということでもある。

そんな、誰でも心当たりのある懐かしい記憶を見事に呼びさます希有な作品であることは、公開当時の製作者側も予想し得なかった爆発的ヒットと、現在に至るまで機会あるごとにリメイクやスピンオフを生み出すきっかけであり続けることが証明している。

.

この短文は、映画「時をかける少女」への偏愛によるきわめて個人的主観に基づくお話です。

リアルタイムで視てその虜になった人も、当時のことは全く知らない”ちょっと古くて懐かしい感じのする”映画として視た人も、それぞれがそれぞれの心に描く「時をかける少女」について語りたくなるようなきっかけにでもなれば幸いです。

物語を整理してみよう。

これは、芳山和子（和子ちゃん）が深町一夫（深町くん）と浅倉吾郎（ゴロちゃん）の間に揺れるというお話です。

もちろんそれだけなら、ごくありふれたラブ・ストーリーということになる。

だけれどもまずは、深町くんとゴロちゃんの間で揺れる様子というものを勝手に分析して楽しむことから始めたいと思う。

スキー場での”出会い”から物語は始まるわけであるけれども、この時点からしばらくの間は和子ちゃんとゴロちゃんの仲良しと深町くんという関係性である。

列車でのシーンにあるセリフ「あなたっていつも、いるんだかいけないんだかわからないんだから…」に象徴されるように、和子ちゃんにとっては”ぼんやりした心配な子”として深町くんは捉えられている。

深町くんも中性的で存在感の薄い印象に描かれている。

ではいつから和子ちゃんは深町くんを”異性”として意識しはじめたかと考えてみれば、それは自転車にはねられそうになって深町くんに抱き止められた時（しかし、この時は”時をかける”体験の印象のほうが強いから、翌日の回想においてほのかに意識しはじめるということになるが）である。

ならばこの時の和子ちゃんの心の中で、深町くんとゴロちゃんのどちらに傾いているかといえば、圧倒的にゴロちゃん側であろう。

それは翌日（日曜日）”二度目”の時かけ体験のあと、ハンカチを返すという名目はあるものの、ゴロちゃんの元へ行くことから証明されているだろう。

”おしょうゆの香り”に託してゴロちゃんへの愛の告白ともとれる和子ちゃんのセリフにはしかし、「しっかりつなぎとめておいてくれないと、私どこかへ行ってしまうわよ」というメッセージも込められていると思う。

深町くんに惹かれはじめている気持ちの表れである。

私はこのシーンを視るたびに「ゴロちゃん、しっかりしろよ！」と思うのです。

和子ちゃんから遠回しではあるけれども告白されて、支えてほしいとアピールをされて、しかしそれに全く気が付かない鈍感さに心が騒ぐのです。

しかし、ゴロちゃんは実はわかっているのです。

素直になれない一般的な男の子なのです。

屋上で顔をハンカチで被ってため息をつくシーンがそれを表しているのだと思います

さて、翌日（月曜日・一回目）に”三度目”の時かけ体験（弓矢が的に当たる幻視）のあと、夜の地震・火事となるわけであるけれども、火事現場から深町くんと二人で夜道を帰る経験で二人の距離はぐっと近づいて、ゴロちゃんと深町くんの中間地点に立つことになる。

そして、深町家から一人となった和子ちゃんがタイル小路で”なぞの人物”に襲われて翌日（火曜日・一回目）へ本格的時かけ体験としてタイムリープするとき「深町くん！」と叫んでしまうことから、以後急速に深町くん側へ傾斜することになることを暗示している。

さて、”なぞの人物”の解釈は？となるのですが、それは後でまとめて考えてみたいと思います。

そして運命の”5回目”となるタイム・リープが事故（御堂の瓦が落下する）によって引き起こされあとは、その原因を作ったであろうと和子ちゃんが薄々気づいている、深町くんととの恋へと発展する。深町くんの正体への不安がふくらんで、それがさらに恋心を刺激する”せつない気持ち”となって心の変化を加速してゆくのであった…。

恋とは

次に、「恋」についての考察を行いたい。

恋とは、どんなものであろうか。

100%のプラトニック・ラブというものは現実には存在しないし、かといって恋が性的なものとは完全に一致するわけでもない。

つまりは、恋とはその間にある”あわい”に存在するものだと思う。

したがって、純愛を描いたこの作品の中には性的イメージがいくつも散りばめられている。それに関する具体的解釈は、話が生々しくなるので、みなさんそれぞれの解釈におまかせすることにして、ここでは触れないこととしたい。

しかし、全く回避してはこの話が成立しないから、少しだけ踏み込むとする。

恋は精神的なものだけでも肉体的なものでもないその間にあるものだから、それぞれを象徴する二つの関係を描くことで恋を語る準備がされる。

ひとつは、ゴロちゃんと和子ちゃんの精神的なものだけで出来ている関係性つまりは幼なじみの間にある”好き”という関係。

もう一つは、福島先生と立花先生の世俗的な（と言ったら失礼か）関係。

この間に一瞬だけ存在する”はかなき恋”をするのが深町くんと和子ちゃんということになる。

この一瞬のいうものは、性に目覚めたことに戸惑う一瞬である。その戸惑いを見事に描ききったこの作品が、第一級の純愛映画として人々の心を揺さぶるのである。

さらに、恋を表現するためのシーンを二つ挙げる。

ひとつは、雛祭りの夜にふざけて倒してしまっていて割れた鏡でケガをした和子ちゃんを助けようとして自らもケガをしてしまうゴロちゃん（偽りの記憶では深町くんであるが）がそれにかまわず和子ちゃんのキズを口に含む行為は”やさしさ”という愛でありそれは当然のこととして男女のそれではなくもっと広くて純粋な愛である。

おしょうゆの香りのやさしさはゴロちゃんのやさしさであり、そのやさしさに包まれた和子ちゃんはゴロちゃんが好きということである。

それは、安心することがもたらす好意である。

そこで気が付くのは対比するもう一つのシーン。

二度目の火曜日の夜、火事現場から深町くんと二人で帰る道で星空の下ぎゅっと抱きしめられたときに感じる安心とは同じではないのだということ。

この時に深町くんを感じる安心はすでに恋へ傾斜した和子ちゃんを感じる安心なのである。

何が違うのか。

それは、実験室での別れのシーンで説明することができる。

ドキドキして「胸が苦しい」愛に戸惑う和子ちゃん。つまりは生理的反応が伴うものが恋なのであり、それだからこそ性的なイメージと切り離して恋は語り得ないのである。

しかし、繰り返しになるけれども、性的なイメージは純愛を語るためにどうしても必要なものであって、描かれるのはせつなくはかない（つまりはやがて世俗的な愛へと変化して消え去る運命なのだから）恋の物語である。

次に、特撮に対する評価について少し考えてみたい。

私の場合は、封切りを映画館で見たドンピシャ世代である。

当時はほとんどの映画館では”入れ替え”が無かったから、朝から行って何度も見た。VTRデッキなどとても高価で買えるはずもなく、だから今のようにネット配信やDVDで見るという感覚からすると信じられない話だろうけれど、まさに”目に焼き付け”て”空で言えるほど”映画を脳内に取り込むことは普通の事だった。まあ、若かったということもあるのだけれど。

だから、角川書店から”フィルムストーリー”という文庫サイズの写真集が出たときには感動したし、サントラ盤（当然レコードです）を聞きながら脳内上映を楽しんだりした。

私の昔話はそのくらいにして。

この映画が公開された頃は、ハリウッドの特撮がいくつか公開された後であったから、タイムリープ（とテレポーション）を表現する特撮の部分について当時から評価は真っ二つだった。映画好きの友人などは、この場面で笑ってしまって以後のストーリーが入ってこないと言っていたのを思い出す。

つまりは、お金を掛ければかなり高度な特撮を取り入れることは可能だった。そして、この映画はかなり低予算の作品だった。

このことが、今に至るまで特撮場面の”チープさ”がこの映画の残念なところであるという誤解をまことしやかに語らせることになっている。

だから、私のように特撮場面に鳥肌が立つほど感動した”肯定派”はいいとして、あの場面を否定的に捉えている人たちに少なくとも誤解を解いてほしいから確認をしておく、お金が無かったからあの手法を取り入れたのではないということです。

ハリウッド程ではないにしても、当時の角川映画はかなり予算をつぎ込んだ作品が多いのです。

なにしろ、戦国自衛隊という映画のために戦車（61式そっくり。ハリポテではなくて金属製でちゃんと自走する。たしかスズキが製造したワンオフ）まで造ってしまうほど全力で取り組んでいたのです。

だから、ハリウッド式の特撮も、それが必要だというのならそのようにしていたはずなのです。

そうしなかったのは、ひとえにあの表現方法が一番だと考えてそのとおりに作ったということです。

もちろん、好き嫌いは良い悪いではないから、これ以上のことを言うことはできない。

だけれども、予算が無くて残念なことになったのでは決してないことだけは、どうか認めてほしいのです。

☆

二回目の火曜日の朝、ゴロちゃんを助けるために家を飛び出した和子ちゃんは、そこで深町くんとのお思い出だと記憶していたものがゴロちゃんのものだと気づいてしまう。

心はすでに深町くんへ大きく傾いているから、居ないとわかっている深町家の温室へと向かわせ、そこで新たにラベンダーの香りのするクスリを嗅いでしまう。

深町くんに会いたいという想いは彼の元へとテレポテーションさせる。

「こんな無茶な飛び方して…」

そう。恋の力は、本来ありえないことを可能にした。

つまりは、特別な訓練をしていない者が思い通りの時間と場所へ跳躍することなど不可能なのだ。

恋の力は、それを成し遂げてしまう。

ここからはノンストップで全てを明らかにしてゆく恋の力に圧倒される気持ちで、視る側もいっしょに時をかけるのだ！

.

そして、土曜日の実験室で全てが明かされるラストということなのだが、その前にひとつ積み残したことがあるのです。

それは、深町くんは一体何をしたのかということ…。

深町くんは、一体何をしたのか

深町くんは、一体何をしたのか。

これは、ラストの解釈に大いに影響する話なのです。

Aコースとして、一般的な深町くん評価は次のようなものだろう。

新薬の原料をつつがなく入手して何事もなく帰るつもりが、実験室での手違いによって和子ちゃんを不必要なトラブルに巻き込んでしまい、それを何とかうまくつじつまを合わせて帰ったということ。

つまりは、二人はもうそれきりで、恋は成就しないというストーリー。

深町くんは、あくまでも善人なのです。

私もそういう解釈をしていたし、この解釈が王道であると思う。

しかし、別の解釈もあるのではないかということの後で考えるようになった。

それは、どうしても腑に落ちない点があるから。

そこで、Bコースとして”裏・深町くん”について語ってみたいと思う。

.

腑に落ちない点とは何か。

それは、あのタイル小路で和子ちゃんを襲った”なぞの人物”は一体誰で何をしようとしたのかということ。

考えられるのは二つ。

.

一つは、”タイムパトロール”が和子ちゃん的能力を消し去ろうとしたというもの。

そうであるならば、何らかの理由でそれに失敗したということになる。

しかしこの可能性は無いと思う。

なぜなら、”タイムパトロール”は他のどこにも出てこないから。

ならばこのシーンは全く無意味ということになる。しかしこの印象的なシーンを無意味だとは考えられない。

.

もう一つは、深町くんの仕業であるということ。

これで間違いないと思う。

では何のために。

それはやはり和子ちゃんに備わってしまった能力を消し去ろうとしたのです。

そして失敗した。

失敗の原因は、クスリが未完成で効果を発揮しなかったから。

このことは、別れのシーンで完成したクスリが使われることで証明されるでしょう。ただしこの場合は、みなさんお分かりのように、Aコースの話になるのです。

.

では、Bコースになる深町くんの仕業とはどういうことになるか。

それは、タイル小路で和子ちゃん的能力を消し去るのではなくて、むしろ増強するためにクスリを嗅がせたのではないかということです。

つまり、クスリと襲われたショックで翌日の朝まで跳んだことが完全なる時かけ体験の最初ということになり、その後に前日（月曜日）へ跳ぶだけの能力をわざと与えたということになるのです。

ではなぜそんなことをしたのか。

それは、和子ちゃんの心を完全に自分のものにするためです。

前日に跳んだあと、本格的に不安に襲われた和子ちゃんは深町くと急接近することになるのだから。

そうであるならば、深町くんは悪人であるということになるのではないか。

.

しかし、Bコースの深町くんは悪人ではないのです。

その理由は、ラストの解釈と共にお話しようと思います。

まずは王道のAコースからお話します。

時をかけて土曜日の実験室へ戻ることができた和子ちゃんは、深町くんから全てを明かされる。

和子ちゃんの心は完全に深町くんとの恋に落ちていて、教室でゴロちゃんと別れるときにはすでに深町くんと共に行く（それが未来とは知らないとしても）決心をしていたのです。

しかし、共に未来へ行くことは出来なくて、せめて深町くんとの思い出に生きようと願う気持ちも否定されてしまう。

そして、恋の力はこの状況を越えることが出来るのではないかという期待は、10年後に再び”約束どおり”会えたにもかかわらず二人にはそれがわからないというせつない結末を迎えるわけです。

廊下のシーン、和子さんと深町くんの距離が加速度的に遠ざかったあと、空しく響くハイヒールの音をみなさんもやるせない気持ちで聞いたことでしょう。

初恋のはかなくてせつない気持ちを見事に描ききった名場面として素直に受け入れられると思う。

次に”邪道”と非難されることを承知で、Bコースについてお話します。

深町くんはこの時代に来て、和子ちゃんと恋に落ちることをあらかじめ運命づけられていたという解釈です。

”裏・深町くん”は和子ちゃんと恋仲となるためにあらゆる画策をする。

まずはゴロちゃんとの思い出を自分のものにしてしまう。

実験室でわざとクスリを嗅がせる。

クスリの効果が不十分だとわかると、タイル小路で追加のクスリを嗅がせて、翌朝の遅刻しそうな時間に跳ばせて事故に遭遇させて”前日”に跳ばせる。

不安に揺れる和子ちゃんの心を、温室での告白（愛のため息＝歌による告白）と二人きりの夜道でのデートで自分のものにする。

これだけだと、何て悪どい奴だということになる。

しかしそうではない。順を追って説明したい。

まずは、スキー教室の日に深町くんは和子ちゃんに”一目惚れ”してしまう。

三人の関係をごく普通の恋愛模様当てはめて考えてみると、いい雰囲気二人と片思いの深町くん。

褒められたことではないけれども、どうにかして自分の方へ振り向かせたいと考えるのは人情というものだろう。

そして、深町くんには”武器”がある。

いけないとわかっていても、恋する気持ちはもう止められないとしたら、一体誰が深町くんを責めることができるだろうか。

だから、深町くんを悪人と断罪することは出来ないと思うのです。

でもそれだけではないと考えるのです。

それは、恋に落ちるのに理由などいらぬのだから、深町くんは自分を行動に駆り立てる”恋心”に戸惑いながらあたかも決められたストーリーをなぞるように結末まで突っ走ったのだと思う。

実は、恋に翻弄されているのは和子ちゃんだけでなく、深町くんもそうだったということが言えるのです。

初恋に翻弄される二人の物語。

これを微笑ましく思う。

深町くんは普通の男の子なのです。

三人の普通の思春期の男女のせつない恋物語という結論に落ち着くのです。

.

”裏・深町くん”の行動はこれで正当化されると思う。

しかしこれだけでは、BコースにはAコースに匹敵するほどの魅力というものが無い。

あえて邪道の解釈をするほどの理由は見当たらない。

.

そこで、ラストシーンの解釈変更が必要なのです。

大学の廊下ですれ違う二人というAコースの解釈ではなくて、二人はこのとき”初めて出会う”というBコースの解釈。

映画では当然描かれていないけれど、その後二人は少しずつ接近をしてゆきやがて恋に発展するのではないかという解釈。

そんなことが成立するのかわかれるだろう。順を追って説明したい。

まず”10年後”で二人は初めて出会う。

そして”10年前”で二人は再会する。

普通はあり得ないことだけれど、深町くんには時間を自由に行き来する”武器”があるのだから時間の前後は関係ないのだ。

しかし、それだけでは説明がつかない。

深町くんに出来るのは時間の自由だけであって、深町くん自身の肉体年齢は自由にならない。

つまり、26才の深町くんが10年前に行ったからといって、自身の肉体が16才になるわけではない。

実はそれも可能だったのだと言うことはあまりにご都合主義であるし、実際に和子ちゃんが自らの過去を時間旅行したときに肉体が若返らなかったことから、これは禁じ手ということになる。

ここでBコースの解釈は成立しないということになるのかと考えたとき、ひとつのキーワードが浮かび上がってくるのである。

デ・ジャ・ヴ（既視感）

この言葉は、二回目の月曜日、部活をサボって帰宅途中で雨が降り出して、和子ちゃんが深町家で雨宿りする場面に出てくる。

和子ちゃんが時間が逆戻りしたことを深町くんに相談するとき、深町くんが”ごまかす”ために持ち出した言葉であり私もそう思っていた。

しかし、Bコースの解釈を証明しようといろいろ考えたときに、あれと思ったのだ。

これは、和子ちゃんに語ると共に、深町くん自身が持ち続けていた、つまりは和子ちゃんに自分がなぜこれほどまでに惹かれるのかという気持ちに対して無意識に出た言葉でもあったのではないかと。

深町くん自身、”10年後の未来の思い出”を持って二六六〇年から一九八四年に来たのだ。

もちろん具体的な記憶は無い。

あくまで既視感なのだ。

深町くんの時系列でも当然16才で出会うのが先で26才で出会うのが（たとえそれを深町くんが憶えていなくとも）後ということになる。

そこで、最後の理屈（言い訳？）を言えば、この物語は”未来の運命の人と先に出会ってしまった”悲劇である。

そしてそれは一般的には和子ちゃんにとっての物語としてそのように解釈されている。

しかし実は、深町くんにとってもそうだったのだ。

二人は一九九四年に出会う運命の人。

しかし、運命のイタズラは二人を一九八四年に出会わせてしまった。

これは、二人にとって”先に出会ってしまった”悲劇なのである。

いや、正確にはBコースは悲劇かどうか分からないことになる。

一九九四年の出会いのあと、もし恋に発展したとするならば、Bコースはハッピーエンドということになると言える。

もちろんこれは、私の勝手な解釈である。

しかし、いろんな解釈をしたくなる、懐の深い映画であるということにたぶん異論は無いのではと思うのです。

今回この短文を書くために、「時をかける少女」を見返した。

やっぱりいいなあと思った。

この映画は、プロデューサーの角川春樹、監督の大林宣彦、主演の原田知世、そしてジュブナイルのマスタ・ピースとして原作を生み出した筒井康隆、各氏のキセキともいえる融合の結晶である。

私の中でいまだにこれを超える純愛物語は無いのです。

.

この短文を読んで下さったあなたも同じ思いをされているのではと考えます。

.

これは、あくまで私の勝手な妄想の産物です。

だから、これをきっかけにあなたがあなたの「時をかける少女」を妄想していただけるのならば、それは私にとって最上の喜びなのです。

読んで下さったあなたに、重ねて感謝いたします。

..

2016年6月 みどりのくま

きわめて個人的な、映画「時をかける少女」についての、とりとめなき話

<http://p.booklog.jp/book/107654>

著者：みどりのくま

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ktnwtuy001/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107654>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107654>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ